

ソグド人とトルコ人の関係についてのソグド語資料 2 件

吉 田 豊

はじめに

モンゴル高原を舞台にして世界史上活躍したトルコ系の民族としては、突厥とウイグルをすぐに思い浮かべる。そのどちらともソグド人が密接な関係にあったことは周知の事実である¹⁾。とりわけ、文字を持たない彼らの間で、ソグド人が一種のブレインとしての役割を果たしたことや、ウイグル文字がソグド文字に由来することは有名である。また最近では突厥の中で胡部を構成したソグド人や、その流れをくむソグド系突厥人と呼ばれる集団の軍事的な役割が注目を集めている²⁾。

突厥とソグド人との関係をソグド語研究の立場から見ると、まずBugut碑文が思い浮かぶ。内容の分析から突厥第一可汗国の他鉢可汗(572-581)の死後の時期に建てられた碑文で、彼の後継者の即位の正当性を主張する碑文であつたらしいことがうかがわれる。同じ時期、別の立場から正当性を主張していた一団があつたらしく、新疆ウイグル自治区昭蘇県で見つかった石人に刻まれたソグド語銘文からそのことが推測される。どちらの場合も、おそらくはソグド人が、ソグド語を使って突厥人の支配者のメッセージを文字言語化している³⁾。

ソグド人と突厥人の関係でもう一つ忘れてはならないのは交易の仲介者、とりわけ中国人との間を仲介した役割である。記録に残されたものとしては、大統 11 (545) 年、勃興後間もない突厥に西魏からの使節として派遣された安諾槃陀や、西突厥の使節として最初はササ

-
- 1) このテーマについては護雅夫の古典的な研究がある [護 1965]。最近では de la Vaissière の大著にも詳しく扱われている [de la Vaissière 2005: 197-225]。突厥人以前から、ソグド人と遊牧民の交流は存在したに違いない。とりわけ漢文史料は紀元前後の時代、康居という遊牧民がソグドを支配していたことを伝える。最近 Kultobe で発掘された 1-2 世紀と考えられるソグド語銘文には、wō'nn'p 「テントの民」という語句が見える。これは康居かどうかは明らかではないが、その可能性は高いだろう [cf. Sims-Williams & Grenet]。
 - 2) 「ソグド系突厥」という呼び名と、それに関する最近の研究動向は森安孝夫によってまとめられている [Moriyasu (forthcoming)]。
 - 3) Bugut 碑文についての筆者の読みと日本語訳は、[森安・オチル: 122-125] にある。昭蘇県の石人については最近林梅村が論攷を発表している [Lin 2005]。日本では大澤孝が、筆者のソグド語銘文の解釈に基づき歴史的背景を論じている [大澤 1999]。またその英語版も発表されている [Osawa 2006]。

ン朝、その後は東ローマ帝国と交渉に当たったマニアク父子が有名である⁴⁾。最近では、北朝期に埋葬されたソグド人墓のレリーフに、ソグド商人と突厥人との交易や会盟のシーンが刻まれたものが発見され、分析の対象にもなっている⁵⁾。このように突厥などのトルコ系の遊牧民族とソグド人との関係はよく研究されたテーマではあるが、不明な点も多く残されている。たとえば7世紀後半に比定されるアフラシアブの壁画の西壁に描かれた突厥人の役割については、未だに研究者の間でコンセンサスが得られていない。それに対応して、この西壁の今は失われている上半分の復元では、突厥の支配者が描かれていたかどうかについて研究者ごとに見解が異なる⁶⁾。さらにソグド人のトルコ化、ソグド語のトルコ語化もまた考究すべき興味深いテーマである⁷⁾。

I バダム出土唐代ソグド語公文書

中国人とトルコ系の民族の仲介者としてのソグド人の役割を如実に示すソグド語資料が最近発見された。これはトルファン盆地、高昌故城の北4キロに位置する巴達木（バダム）遺跡で発掘された文書の断片である。筆者は2005年の段階で、トルファン学研究所（Turfanforschung）のCh. Reck博士を介して資料の写真を見ることができた。その後、北京大学の榮新江教授と電子メールの通信により内容の検討を行った。その成果の一部は、榮新江2006aにおいて発表されている⁸⁾。本稿ではソグド語のテキストと翻訳を提出し、内容について検討することにする。なお現在では文書の写真は『文物』2007年第2期において発表されており、容易に見ることができる⁹⁾。また発見や発掘の状況については『考古』2006/12, pp. 47-72を参照されたい。

文書のソグド文字は漢字の朱印からみても縦書きで、サイズは縦24.9 cm 横10.8 cmである。文書の上部は破損している。下でも述べるように、7世紀後半の文書であり、当時の案卷は縦30 cm程度であったから、破損部はそれほど大きくない。現在この断片には2004 TBM 107: 3-2という整理番号が与えられている。

4) このテーマについても de la Vaissière 2005: 204-205, 234-237 参照。

5) 榮新江の最近の論文がきわめてよくまとまった分析である [榮 2006]。

6) この壁画についての論文集が最近になって発表されており、研究者の見解の違いがよくわかる [cf. Compareti & de la Vaissière]。

7) Krippes の論文は、その魅力的タイトルに反して、実質的な成果はなんら含まれていない。なおソグド語のトルコ語化について筆者は現在論文を準備中である。当面はここでも de la Vaissière が参照される [de la Vaissière 2005: 322-331]。

8) 詳しくは榮新江の印刷中の論文を参照しなければならない。

9) 筆者の本資料および別の小断片についての英語による論文は、現在中国において印刷中である。

テキストと翻訳

- 1 [(.) [] (yštrt) nyst z'y-h δwr
 2 []rt šw'y L' w'c't δ'r'ym xr'r'wγ
 3 [](w) 'kw s'y'cyw s'r pr'yšt δ'r'ym pštrw
 4 ['YK'?](r)ynt 'sky s'r 'ys'nt cw w'xš βyr'yymn
 5 ['kw 'šm'xw?](s)'r 'zt' wn'yymk'n BLANK

1 行分空白

- 6 [BLANK] rwnkšwγ '(δ) [ry srδ "z?]

「……はない。土地は遠く……我々は……が行くことを許さなかった。……カルルク [の……を] (?) 我々は西州に送った。その後……たちが上手に来るとき、私たちはどんなニュースを手に入れても [あなた様] にお知らせいたします。

龍朔3 [年……]

本文書は、ソグド語研究の方面からも多くの問題を提起する。下でも述べるように文書の年代は662/3年に特定できるから、ソグド語内部の言語変化の時代を知ることができる。たとえば未来を表す小辞のk'nはk'mより新しい形式だが、8世紀初めのムグ文書ではk'mしか見えないものの、変化はすでに起こっていたことが知られる¹⁰⁾。またこの頃のソグド語文献では頻出する、接続詞のrtyやZY、冠詞(ZK, 'xw, etc.)の要素が全く見られないことなども注目される。これがトルコ人との言語接触による変化なのか、単に書記上の問題なのかは分からない。今後ソグド語とトルコ語との言語接触の問題と共に論じるべきテーマである。

『文物』で公開された写真から明らかなように、この断片には3箇所朱印が押されている。朱印の漢字は「金満都督府之印」と読むことができるという。榮新江(印刷中)の専論で扱われているように、出土地は不明であるものの、本文書と関連すると考えられる漢文の案巻の断片が多数発見されており、その分析から、西突厥瓦解後のカルルク(哥邏祿)に関して問題が発生しており、そのことに関する一連の文書の一つであることが推測されている。また漢文文書の分析から、rwnkšwγが年号の「龍朔」を表記していることが判明する。続く'(δ)[]は'(δ)[ry]「3」ないしは'(δ)[w]「2」と補うことができるから、絶対年代が663年ないし662年であることが確認される。

ここで注目したいのは、おそらくはソグド人がソグド語で書いた手紙ないしは報告書が、公文書として官印を押され発送されていることである。たとえ末端の行政組織であったとは

10) 未来を表す小辞の形式にはk'm, k'n, (キリスト教文献)q'が知られている [Henning: 106]。この順で弱化した形式であることは明らかである。

言え、ソグド語で書かれた文書が唐王朝の公文書として扱われていた事実は特筆に値する。この文書を受け取った、西州都督府にもソグド語を読むことができる人間（おそらくソグド人）が、勤務していたに違いない¹¹⁾。筆者は中国史に明るくなく、唐の時代の公文書に漢文以外の言語で記されたものがあるかどうか知らないが、あったとしてもきわめて異例のことではないだろうか。もう一点注目されるのは、ソグド人がトルコ系の民族の動向を唐側に伝えていることである。唐政府がトルコ民族との交渉にソグド人を仲介することの延長線上にあり何ら不思議ではないが、実際の文書が発見された意義は大きい。

中国側がソグド人を介して突厥やトルコ系の遊牧民についての情報を得ていたことは、本文書のカルルクの名称 *xr'r'wγ* から窺い知れる¹²⁾。かつて「突厥」の原語が議論されたことがある。この音写形式の成立年代と当時の発音から考えて、原語が *turk* を含んでいること、末尾に *-t*, *-d* のような歯音が存在したことは明らかである。P. Pelliot はこの歯音はモンゴル語の複数形の語尾であろうと考えた。後に J. Harmatta はソグド語の複数形の語尾であろうと推定した。ブグト碑文に *tr'wkt* という形式が確認されるに及んで、L. Clark は Harmatta の説を支持し、この語形こそが突厥の原語だとした。必ずしも学界の定説となっているとは言えないが、古代トルコ語自体に類似の形式が想定できない限り、ソグド語形が原語であったと考えざるを得ないであろう¹³⁾。

その同じことはカルルクについても言うことができるであろう。I. Ecsedy 及びそれを受けた栄新江の研究によれば、カルルクの民族名は 2 種類あり、一方は歌邏祿、哥邏祿ないし葛邏祿、他方は葛祿、割祿である。前者は後者より古い史料に見える¹⁴⁾。「邏」の文字の有無は、語中の母音の有無 (*qaraluq* vs. *qarluq*) を反映していると考えられる。ちなみに今回出土した同一事件についての漢文文書でも前者の系列の哥邏祿が現れている。バダム出土のソグド語文書の形式 *xr'r'wγ* は明らかに [*xaraluγ*] を表記したものである。一方、この文書からおおよそ 150 年後、9 世紀の初めに建てられたカラバルガスン碑文では、漢文版で葛

11) この時期、麟徳二年(665)段階で高昌県には翟浮知□という訳語人が勤務していた事が知られている [李方 1994: 49]。名前からソグド人であることが分かる [吉田 1998: 40-41]。

12) 最近になってチュー川流域で発見されるコインに *xr'lwγ x'γny pny* という銘文をもつものが発見された。これはインターネットのサークル Sogdian-L (Sogdian-L@yahogroups.com) において 2007 年 7 月 30 日に P. Lurje が公表している。年代は分からないが、古い形式を示していると言える。

13) 突厥の原語に関する議論と研究史については、笠井幸代が大阪大学東洋史学科に提出した卒業論文「六世紀から九世紀における古代チュルク語の漢字音写 ——「突厥」名称問題を解くために——」(1997) も参考にした。未発表の論文の利用を許された笠井博士に感謝する。また、Gy. Hazai の論攷も参考になった。

14) Ecsedy: 24-25; 栄 (印刷中) 参照。栄新江は内田吟風の研究も利用している。なお今回発見された形式から、Ecsedy が提案した、この民族名が *qar* 「雪」からの派生語であるとする語源説は採用できない。

祿, ソグド語版では, $xrlw\gamma$ と綴られている。語中の '(aleph) の有無の違いからこちらは $[xarlu\gamma/x]$ を表記していることは明らかである。ちなみに 8 世紀初めのルーン文字碑文では Q. R. L. uQ と表記されていて, 語中の母音の有無に関してあいまいである。

従って漢文史料に現れる 2 種類のカルルクの名称は, ソグド語資料に在証される 2 つの形式 $xr'r'w\gamma$ と $xrlw\gamma$ に対応していることになる。このことと突厥の名称がソグド語形をベースにしている事態を考慮すれば, ソグド人からの情報に従っていた当時の中国人は, ソグド語の発音形式を漢字で音写していたのだと推測できる。それどころか, 永徽元年 (650) に中書省の訳語人であった史訶耽のようなソグド人の存在を考慮すれば [羅: 206-211], 漢字による表記でさえ唐朝内部のソグド人官僚や出先の官吏が行っていたのかもしれない。

II セヴレイ碑文成立の背景について

モンゴル高原では 3 点のソグド語碑文が発見されている。上で言及した 6 世紀終わり突厥第一可汗国時代のブグト碑文と, 9 世紀初め, ウイグル可汗国時代のカラバルガスン碑文のほかにセヴレイ碑文が知られている。こちらは最初の報告者である Kljaštornyj & Livšic によってウイグル時代, とりわけ 3 代可汗 (759-779) が中国から凱旋するときの帰路上に建てたものとされた¹⁵⁾。筆者は 1997 年 8-9 月, 大阪大学の森安孝夫のチームに加わり, セヴレイ村に行き碑文そのものを現地で調査し, 拓本を作成した。銘文解読の成果はすでに発表されている¹⁶⁾。ただし, 残された部分はあまりに断片的で碑文成立の背景を銘文から知ることはできない。いくつかの仮説が考えられ, 森安と筆者は, 821-823 年に実現したウイグルと吐蕃, 唐による三国会盟を記念した碑文ではないかと考えたことがあった。最近の著書で森安はその仮説を繰り返すが, 筆者は, 別の仮説を支持するようになっていく。それをここでは紹介することにする¹⁷⁾。

セヴレイ碑文の現在残された部分は縦 80 cm, 横 52 cm, 厚さ 69 cm で, 小さな「冷蔵庫」のようなずんぐりした形をしている。ソグド語 (右側) とルーン文字表記のウイグル語 (左側) はどちらも縦書きで, ソグド語が 7 行, ウイグル語が 7 行残され, ほぼ左右対称に

15) Kljaštornyj & Livšic およびそのロシア語版の護雅夫による紹介を参照。護自身の説については下記注 (23) を参照せよ。

16) 報告は森安・オチル: 225-227 にある。

17) 我々の仮説は森安・吉田において発表された [森安・吉田: 160-166]。森安はその仮説を最近の著書においても主張している [森安 2007: 351-354]。筆者の仮説は 2003 年 5 月に Collège de France で行った講義で触れ, 同年 11 月東北大学で開催された内陸アジア史学会での講演でも紹介したが, 口頭の発表にとどまっていた。二つの仮説の当否は碑文の内容から判断できない。ただラサの会盟碑がチベットの首都に立てられたことを考慮すれば, 対応するウイグル側の碑文はその首都であった現カラバルガスンで発見されることが期待されるのではないかと。

なっている。形状から判断して本来は板状であったはずの碑文の両端と上下が破損し、中央部が残ったと考えられる。ソグド語・ウイグル語面の裏側には文字は確認されないが、平面になっているからこちらにも文字は刻んであったろう。上述した碑文の厚さはカラバルガスン碑文の 70 cm に匹敵する。カラバルガスン碑文の場合、漢文面は 1 行 90 文字からなっていたことが判明しており、漢字一字の高さは 5 cm 程度であったから、亀趺や螭首を除いた碑面だけで 400 cm あったことになる。これに匹敵する大きさの真っ白い大理石に刻まれたセヴレイ碑文が、砂漠にそびえ立つ威容は想像して余りある。ソグド文字の書体はカラバルガスンの碑文のそれと酷似しているから、ウイグル時代と推定して誤りはないであろう。しかも碑文の巨大さからウイグル可汗国の全盛時代に属しているという推定も自然である。またカラバルガスン碑文との比較から、ソグド・ウイグル面の反対側には漢文面があったと推定される¹⁸⁾。しかも漢文面が、全面を占めているという点を考慮すれば、こちらが正面であったことになる。そこで筆者は、『新唐書』の「回鶻伝」の以下の記事に注目する。ここでは、宰相の李泌が 787 年に時の皇帝徳宗 (779-805) に語った言葉が引用されている。それによれば、ウイグルの可汗は安史の乱鎮圧での唐への貢献を誇って国の門の所の石に銘文を刻み、唐の使者に示しているという：

且回鶻可汗銘石立國門曰唐使來當使知我前後功云々（『新唐書』卷 221 回鶻伝上、標点本、6123 頁）¹⁹⁾

筆者は、『新唐書』のこの記事に対応する碑文こそがセヴレイ碑文であると考え。というのも当時セヴレイ地域は「門」を含む名称である花門山と呼ばれ、しかも「花門」がウイグルの代名詞となっていたからである²⁰⁾。安史の乱と花門を結びつける杜甫の「官軍已に賊寇に臨むと聞くを喜ぶ二十韻（喜聞官軍已臨賊寇二十韻）」（『全唐詩』卷 225 第 12 首）の次の一節も参考になる：

18) カラバルガスン碑文の場合、一方の面は全面がルーン文字表記のウイグル語、もう一方の面と二つの側面に漢文とソグド語文が刻まれている。ソグド語はこの場合も向かって右側を占め、中央部から始まって右側面で終わっていたと考えられる。ちなみにセヴレイ碑文のソグド語版の第 1 行目には、句読点のあとに空白部があり、やはりカラバルガスン碑文との比較から、冒頭のタイトルに当たる 1 行とそれに続く撰者たちの称号と名前があったと考えられる。この点については注 16 で言及した報告書を参照せよ。

19) 佐口透は以下のように日本語訳している：「……また、一方では、回鶻可汗は石に銘し、国の門のところに〔石碑を〕立てて、「唐の使者が来れば、まさにわが前後の功を知らしむべし云々」と言っております」（『騎馬民族史 2 正史北狄伝』平凡社東洋文庫 223、東京 1972、400）。

20) 花門山堡は『新唐書』の「地理志」（甘州張掖郡刪丹県の条、標点本 1054 頁）によれば居延海の北 300 里だと言い、エチナからセヴレイまでの直線距離 200 km と比べて、大きく異ならない。なおセヴレイ地域を唐代の花門山に比定したのは森安孝夫である〔森安・吉田：164〕。

「花門 絶漠に騰^{あが}り、拓羯 臨洮を渡る (花門騰絶漠, 拓羯渡臨洮)」²¹⁾

これは757年の閏8月頃に作られた詩であり、当時ウイグルが実際にエチナを經由して南下した可能性もあるであろう²²⁾。

それではこの碑文を建てた可汗は誰であっただろうか。安史の乱鎮圧後の787年の段階ですでに存在していたのであるから、可能性としては3代移地健可汗(759-779)と4代頓莫賀可汗(779-789)が考えられる。しかし安史の乱への介入や、その後の対唐積極策から考えて、おそらく第3代可汗が建てたとしか考えられないだろう。

筆者の推定は、結果としてKljaštornyjとほぼ同じになった。彼は推定の根拠として、ルーン文字版に *ingi jylyar* と読み、それをウイグルの第三代可汗に与えられた称号の「英義」と比較した。しかしこの語は1997年の調査チームでルーン文字版を担当した片山章雄によれば全く判読できないという[森安・オチル: 226]。また「英義」という称号が、Kljaštornyjの推定どおりに中国から帰国する以前に第3代可汗に与えられたとは考えられないということ、本国への帰還のルートがセヴレイを経っていたかどうかは分からないという護雅夫の批判も想起される²³⁾。Kljaštornyjはまた、セヴレイ碑文が本来3言語版の巨大な石碑であったことも推定できなかつたし、『新唐書』の記事にも注目しなかつた。要するにKljaštornyjは誤った前提に立って筆者とほぼ同じ結論を導いたことになる。

21) 吉川幸次郎が推測する通り、拓羯は柘羯と同じ語で、前者は誤写に違いない。「拓羯」はソグド語の「戦士」を意味するチャカル(Cakar)の音写である[吉川: 373; 吉田1998: 43, 48, n. 44]。チャカルの来源については[Yoshida 2003: 134, n. 16]も参照。ちなみに、杜甫の詩において見られる柘羯は、チャカルの意味を考える上でも重要な意味を持つ。757年のはじめ段階で安史の乱鎮圧の援軍として集まった軍は、ウイグル、コータン、安西、北庭、拔汗那(フェルガナ)、大食であった[森安 2002: 131-132]。そして尉遲勝率いるコータン軍を安西と同様唐の軍と考えれば、純粋な外国軍はフェルガナと大食だけである。従って西トルキスタンから援軍としてやってきた彼らが、柘羯と呼ばれていたことになる。この大食軍やフェルガナからの兵士たちに関して、稲葉は大食、すなわちアッパース朝の正規軍ではあり得ず、アッパース朝の東部にたむろしていた傭兵集団であろうと推測する。この推測は正しいと考えるが、柘羯が一種の傭兵であるという事実は、彼の考えを補強するだろう。チャカル問題についてはde la Vaissièreが2つの論文を発表しているが、杜甫の詩は利用されなかつた。この詩で言及された柘羯は、759年12月の段階で三殿において皇帝から褒美をもらっている。de la Vaissièreは、こちらの柘羯は安祿山軍から寝返った柘羯だとするが誤りだろう[cf. de la Vaissière 2005 a: 259]。

22) 詩の製作年代については吉川参照。この詩に描かれた状況の分析には中田美絵の論文「不空の長安仏教界台頭の背景について」が参考になった。原稿の段階で筆者に提供して下さった中田博士に感謝する。

23) 護自身は甘州ウイグル時代を考えるが、この巨碑が小さなオアシス国家の可汗によって立てられたとは考えられない。

参考文献

- Clark, L. V. (1977) Mongol elements in Old Turkic? *Journal de la Société Finno-Ougrienne* 75, 110 – 168.
- Compareti, M. & de la Vaissière, É. (ed.) (2006) *Royal Nauruz in Samarkand*. Proceedings of the Conference Held in Venice on the Pre-Islamic Paintings at Afrasiab, Supplemento No. 1 alla Rivista degli Studi Orientali Nuova Serie vol. 78, Pisa-Roma, Accademia Editoriale.
- Ecsedy, I. (1980) A contribution to the history of Karluks in the T'ang period. *AOH* 34, 1980, 23 – 37.
- Harmatta, J. (1972) Irano-Turcica. *AOH* 25, 263 – 273.
- Hazai, Gy. (2002) Gedanken zu einer Hypothese Paul Pelliot's. In: M. Ölmez and S. -C. Raschmann (eds.), *Splitter aus der Gegend von Turfan*, Istanbul/Berlin, 87 – 92.
- Henning, W. B. (1958) Mitteliranisch In: *Handbuch der Orientalistik I/IV/1 : Iranistik. Linguistik*, Leiden/Köln, 20 – 130.
- Kljaštornyj, S. G. & Livšic, V. A. (1971) Une inscription inédite turque et sogdienne: La stèle de Sevrey (Gobi méridional). *JA* 259/ 1 –2, 11 – 20.
- Krippes, K. (1991) Sociolinguistic notes on the Turcification of the Sogdians. *CAJ* 35, 67 – 80.
- la Vaissière, É. de, tr. by Ward, J. (2005) *Sogdian traders. Handbook of Oriental studies*, section VIII, Central Asia, vol. 10, Leiden/Boston.
- la Vaissière, É. de, (2005 a) Čakar sogdiens en Chine. In: E. de la Vaissière & E. Trombert (eds.), *Les Sogdiens en Chine*, Paris, 255 – 260.
- la Vaissière, É. de (2005 b) Čakar d'Asie centrale: À propos d'ouvrages récents. *SI* 34, 139 – 149.
- Lin, M. (2005) A survey of the Turkic cemetery in Little Khonakhai. In: É. de la Vaissière & É. Trombert (eds.), *Les Sogdiens en Chine*, Paris, 377 – 396.
- Moriyasu, T. (forthcoming) Japanese researches on the history of the Sogdians on the Silk Road mainly from Sogdiana to China.
- Osawa, T. (2006) Aspects of the relationship between the ancient Turks and the Sogdians: Based on a stone statue with a Sogdian inscription in Xinjiang. In: M. Compareti et al. (eds.) *Eran ud Aneran. Studies presented to Boris Il'ič Maršak on the occasion of his 70th birthday*, Venice, 471 – 504.
- Pelliot, P. (1915) L'origines de T'ou-kiue, nom chinois des Turcs. *TP* 16, 687 – 689.
- Sims-Williams, N. & F. Grenet (2006), The Sogdian inscriptions of Kultobe. *Shygys*, 2006/1, 95 – 111.
- Yoshida, Y. (2003) Some reflections about the origin of čamūk. In: 森安孝夫責任編集『中央アジア出土文物論叢』京都, 127 – 135.

- Yoshida, Y. (forthcoming) Sogdian fragments discovered from the graveyard of Badamu.
- 稲葉 稔 (2001) 安史の乱時に入唐したアラブ兵について 龍谷大学国際文化学会『国際文化研究』5号, 16-33.
- 栄 新江 (2006) 粟特与突厥 —— 粟特石棺圖像の新印証 —— 『西北民族論叢』4, 1-23.
- 栄 新江 (清水はるか・関尾史郎訳) (2006 a) (講演) 新出トゥルファン文書に見えるソグドと突厥 『環東アジア研究センター年報』1号, 5-15.
- 栄 新江 (印刷中) 新出吐魯番文書所見唐龍朔年間哥邏祿部落破散問題.
- 内田吟風 (1968) 初期葛邏祿族史の研究 『田村博士頌寿東洋史論叢』, 57-70.
- 大澤 孝 (1999) 新疆イリ河流域のソグド語銘文石人について: 突厥初世の王統に関する一資料 『国立民族学博物館紀要』20, 327-378.
- 護 雅夫 (1965) 東突厥国家内部の胡人 『古代学』12-1, 1-20.
- 護 雅夫 (1973) S=G クリャシュトルヌィ, V=A=リフシツ共著 セヴレイ石碑 『東洋学報』55-4, 109-120.
- 森安孝夫 (2002) ウイグルから見た安史の乱 『内陸アジア言語の研究』XVII, 117-170.
- 森安孝夫 (2007) 『シルクロードと唐帝国』東京.
- 森安孝夫・オチル (1999) 『モンゴル国現存遺跡・碑文調査研究報告』, 大阪.
- 森安孝夫・吉田豊 (1998) モンゴル国内突厥ウイグル時代遺跡・碑文調査簡報 『内陸アジア言語の研究』XIII, 129-170.
- 吉川幸次郎 (1980) 『杜甫詩注』第4冊 東京.
- 吉田 豊 (1998) Sino-Iranica 『西南アジア研究』No. 48, 33-51.
- 羅 豊 (1996) 『固原南郊隋唐墓地』北京.
- 李 方 (1994) 唐西州的訳語人 『文物』1994/2, 45-51.

(京都大学大学院文学研究科)